日中戦争史研究会
2011 年 9 月 10 日　於愛知大学

馬占山の抗日活動に対する支援について

―生活週刊社の募金活動を中心に―

名古屋大学　楊　韜

●背景

今年（2011 年）は、満州事変（9・18 事変）から 80 周年という節目の年にあたり、中国各地において記念活動が行われている。たとえば、チチハル市では、東北地区で日本軍と戦った馬占山について、「江橋抗戦」80 周年記念シンポジウムが開かれた[1]。これまでも、馬占山に関しては、彼の抗日活動、とりわけ彼が率いて戦った「江橋抗戦」について広く語られてきた。周知のように、満州事変の勃発後、当時の国民政府は「不抵抗」方針を持ち出し、また、後述の歴史背景にも述べるように、東北地区での抗日活動は政治的に分裂した状態の下で展開された。したがって、彼らの抗日活動を支えたのはどのようなものだったのか。また、抗戦活動に必要な資金はどのようにして得られたのか。本稿は、当時の中国全土からの支援というマクロな視点を押さえつつ、生活週刊社の募金活動というミクロの事象を取り上げ、その実態を解明する試みである。

●先行研究の検討

本題に入る前に、まず、生活週刊社（生活書店）、及び馬占山に関する先行研究について簡単に整理しておきたい。生活書店は、近代中国、とりわけ日中戦争期において大きな影響をもたらした出版機構である。ジャーナリスト鄒韜奮は上海のセント・ジョーンズ大学を卒業後、中華職業教育社で週刊誌『生活』の編集に携わった。1932 年 7 月、鄒韜奮は中華職業教育社から独立し、生活書店（生活週刊社の「書報代办部」を母体とする）を創設し、引き続き週刊誌『生活』を発行した。これまでの生活週刊社（生活書店）に関する先行研究は、主に三つの側面に焦点を当てている。すなわち、①生活週刊社（生活書店）の出版物における抗日言説に関する分析、②生活週刊社（生活書店）の出版物にみられる都市住民の生活文化に関する考察、③生活週刊社（生活書店）の経営者である鄒韜奮の思想変遷に関する検討である。これらの先行研究のなかで、本稿との関係から言えば、石島（1971）は、生活週刊社が馬占山支援の募金活動について簡単に言及しているのみである。一方、馬占山に関しては、ほぼすべての抗日戦争史研究書において多かれ少なかれ言及されていると言えよう。常城（1982）は馬占山について比較

[1] 人民網報道記事：http://unn.people.com.cn/GB/22220/142927/15420171.html

的詳細に概説したものであり、日本語訳にもされた文献である。全体的な傾向として、馬占山に関する言及のほとんどは彼が率いて戦った「江橋抗戦」に関する戦場史研究という性格を帯びたものであると言える。その中で、張（2007）は、管見の限り唯一「江橋抗戦」を考察しながら、生活週刊社の支援活動について言及したものである。しかし、やはり簡単な支援金金額のまとめにとどまり（しかも金額に関しても不完全なデータとなっている）、具体的な考察は欠けていると思われる。

●目的

以上に述べてきた先行研究を踏まえて、本稿では以下の五つの側面から、生活週刊社の馬占山支援の実態解明を目指す。①どのような背景の下で、募金活動が始まったのか。②どの程度の支援金が集められたのか。③どのような人／団体が献金したのか。④馬占山の「変節」及び「反正」をめぐって、生活週刊社はどのような態度をとられたのか。⑤集められた支援金の扱い（管理、送金、集計、公表など）について、生活週刊社はどのような注意を払ったのか。

●生活週刊社の募金活動

（一）募金の開始

周知のように、1931 年秋ごろの中国は、政治的分裂の状態にあった。蒋介石の軍事独裁強化に反対し、同年 5 月王精衛ら反蒋派は広東に新国民政府を成立させた。一方、国民党と共産党の間にも、より深刻な対立が生じていた。馮玉祥・閻錫山らとの中原大戦に結着をつけた蒋介石は、共産党根拠地に対する第一次、第二次の「掃共囲剿」を行った。しかし、二度の「掃共囲剿」が失敗し、1931 年 11 月、毛沢東らが江西省瑞金に中華ソビエト臨時政府を成立させた。蒋介石はただちに 30 万の兵力を動員して、第三次「掃共囲剿」を開始した。生活週刊社の募金活動は、このような状況のなかで始まった。

最初には、鄒韜奮は 11 月 14 日の『生活』の『小言論』欄に馬占山支援の背景について、「（一）為民族争光的馬将軍」、「（二）一党専政與一党専利」、「（三）敬告義勇軍諸君」の連続記事を通して述べた[2]。次に、隔週の「小言論」欄に鄒韜奮はふたたび連続記事の「（一）我們何以尊崇馬将軍？」、「（二）国際間的醜態畢露」、「（三）敬告義勇軍諸君」を掲載した。また、同じ号に写真入り記事「為民族争光的馬占山将軍」を掲載し、馬占山の経歴を詳細に紹介した[3]。さらに「緊急告知」を掲載し、次のように周知した。「弊誌は発行周期が長いため、間隔日数が多い。迅速に弊社の黒竜江省戦士支援方針を周知するため、11 月 15 日以降の申新両紙（『申報』と『新聞報』）にて告知広告を掲載した。16 日の告知広告は天厨味精廠の無料提供で、17 日の告知広告は康元花鉄印刷製缶廠の

[2] 『生活』第 6 巻第 47 号（1931 年 11 月 14 日）
[3] 『生活』第 6 巻第 48 号（1931 年 11 月 21 日）

無料提供で、18日の告知広告は華安合羣保壽公司の無料提供で掲載することができた。感謝の意を申し上げる」[4]。ここでは、生活週刊社が、他社の新聞紙面にどのような告知広告を掲載したのかを確認しておきたい。『申報』での告知広告は「生活週刊社為籌欵援助黒省衛国健児緊急啓事」と題して、すでに寄せられた支援金の献金者／団体の名前とともに、次のように述べている。「馬占山将軍が率いる衛国健児の抗日奮闘は、全国民衆に感動を与え、また国民の人心を大いに振興させた。しかし、孤立して戦う以上すでに兵士たちは食糧が尽きる緊急状態にある。軍事面での援助責任は政府に委ねるが、食糧などの救援責任は国民にもある。弊社は支援のための募金を開始する」[5]。この後、「第二次緊急啓事」から「第五次緊急啓事」までの告知広告が『申報』に掲載されたことが確認できる[6]。掲載には毎回、集まった支援金の献金者／団体の名前を掲載された。献金者／団体は日々増加したため、11月21日から『生活』の誌面に掲載されることとなった。

そして、集まった支援金は、どのように馬占山へ送られたのか。当初の状況について、以下の記事「本社致馬将軍電」から見てみよう。「上海の新聞及び『生活』で募金を呼びかける告知広告を出した。そして、第一回は4000元を、15日に中国銀行、交通銀行を通して送った。その後、18日まで四回送った。合わせて44600元。会計師によってすべての領収証などを確認したうえ、のちに『生活』誌面にて公表する予定である」[7]。その後、11月下旬の報告によると、中国銀行を通して38507元、交通銀行を通して16500元、合計55007元を送金した[8]。生活週刊社は、集められた支援金をいったん中国銀行や交通銀行に預け、そしてその中から分けて定期的に馬占山へ送金した。また、銀行口座に預けたお金に対して生じた利息については、1931年年末に以下のような報告が掲載された。「12月22日から1932年1月4日にかけて集められた支援金合計12879元3角8分について、12月31日日付の中国銀行貯金の利息49元5角8分を得た。銀行手数料2元7角2分を除くと、実際の利息収入は46元8角6分である。これで、合計12926元2角4分となった」[9]。

（二）献金者について

主に五種類の人／団体から支援金が集められた。まず、もっとも多いのは一般個人からの献金であるが、この種の献金はおおむね小口献金である。「粤東女子」という名前の女性から2万5千元の献金があったという珍しい例もあるが、ほとんどは数角単位から数十元のものである。なかには、小学生からのものもあった。第二に、民間企業から

[4] 『生活』第6巻第48号（1931年11月21日）
[5] 『申報』（1931年11月15日）
[6] 『申報』（1931年11月16日、17日、18日、19日）
[7] 『生活』第6巻第48号（1931年11月21日）
[8] 『生活』第6巻第49号（1931年11月28日）
[9] 『生活』第7巻第1号（1932年1月9日）

の献金である。様々な業種の企業から献金があり、その額についても数十元単位から数千元単位と幅広い。第三に、数は多くないが、地方政府及びその所属機関からの献金が見られた。理由はいまだ不明であるが、なかでも、とくに目立つのは湖南省政府及びその管下の機関である。第四に、多くの民間団体からも献金があった。各種学校の抗日救国組織や各業界の組合組織が中心である。第五に、小学校から大学までの各種学校からの献金である。

この五種類の人／団体については、上海及びその周辺地域が全体の中心を占めているが、全国各地から寄せられた。北は北京、山東、南は貴州、湖南など広い地域に及んでいることがわかる。

（三）馬占山「変節」及び「反正」をめぐる対応

1932 年 2 月に「変節」した馬占山は、4 月 3 日に管下軍隊を巡視すると称して、ひそかにチチハルを出発して、4 月 7 日に黒河に出現し、再び抗日の態度を表明した。馬占山寝返りの理由については、様々な推測がなされた。島田（1966）は次の四つを挙げている。すなわち、第一に、中国民衆から「軍神」と絶賛された彼が、「変節」後「売国奴」と呼ばれることとなったこと、第二に、全国から 98 万元にも達する陣中見舞金が彼のもとに殺到したが、それを、返却を迫られたり、部下から分配を求められたりしたこと、第三に、無学文盲の彼にとって軍政部長という地位は負担が重過ぎたうえ、日本人文官に閣僚の席上で馬鹿にされたこと、第四に、省の公金 800 万元を使いこみ、その点を日本軍部に糾弾されるのを恐れたことである。馬占山の「変節」の真意やその経緯については、ここでは深入りはしないが、その際の生活週刊社の対応については明らかにする必要があるだろう。

馬占山が「変節」したと噂された 1932 年 2 月中旬、生活週刊社は馬占山へ電報を送り、その究明を求めた。電報には「もし噂が本当なら、馬将軍が生きていても死んだと同様であろう。将軍一個人の生死は小さいことだが、中華民族にとっては大きな侮辱となる。非常に遺憾である」[10]。そして、3 月 12 日の『生活』には瀋陽からの報告記事『馬占山の究竟』が掲載されたが、当時はおそらくまだ真相が明らかになっていなかったため、主に馬占山が困難な局面にあると論じられた。その後、馬占山は再び抗日活動を開始し、いわゆる「反正」した。それを受け鄒韜奮は、1932 年 4 月 23 日の『生活』に『馬占山「反正」』と題する記事を掲載した。記事では、馬占山が一度「変節」したことについて批判されたが、「反正」した以上、彼を支援すべきであると述べ、また馬占山の「反正」が日本軍には大きな衝撃を与えたと論じている。[11]

（四）募金の終了とその後―十九路軍支援へ

---

10 『生活』第 7 巻第 10 号（1932 年 3 月 12 日）
11 『生活』第 7 巻第 16 号（1932 年 4 月 23 日）

1932 年 1 月 16 日、生活週刊社は『生活』誌面に募金終了の通告を掲載した。それは、馬占山が海倫からの電報を受けて下した決断である。馬占山の電報の中で、「目下は自給可能であるため、こちらへの送金を停止して（長江水害の）被害者を救済するよう」と書かれている[12]。そして、生活週刊社はすでに送られてきた支援金については引き続き馬占山へ送金するが、新規の支援金の受付を終了するとした。

しかし、雑誌の発行期間によって、時間差が生じたため、募金終了の通告を掲載した後も地方から続々と支援金が生活週刊社に届けられた。1 月 23 日の『援馬捐款結束後之余聞』という記事に「1 月 16 日終了の予定だったが、地方からの支援金は依然として届いている。1 月 18 日までに合計 126015 元 5 角 7 分となった」[13]と記している。

1 月中旬に馬占山をめぐる噂が広がったことで、生活週刊社は『関於援馬捐款的建議』を掲載して、集められた支援金の残金（すでに馬占山へ送金した部分を除いた金額）を東北義勇軍への支援に回すという提案を出した[14]。その折に、上海事変（1・28 事変）が勃発した。当時上海付近に配置されていた広東系の第十九路軍は、日本軍との激しい戦いを約一ヶ月の間続けていた。この状況を受け、生活週刊社は、支援金の残金を十九路軍の支援に使うことにした。3 月 5 日の『援馬捐款結束方法』には、次のように述べられている。「この度上海での戦事については、幸いにも十九路軍の勇敢な抵抗があった。弊社がこれまでに募った馬占山支援金は、もともと抗日軍事活動のための支援金である。現在、十九路軍が緊急の支援を必要としているため、残金 9897 元 6 角 5 分を彼らへ送ることとする。献金して下さった皆さんのご理解と同情を得たい」[15]。このように、最終的に、馬占山支援金の未送金分は、上海事変の発生によって、十九路軍への支援に回ることとなった。

（五）募金状況の公表について

生活週刊社は、募金開始以来、常にその状況の公表に注意を払っていた。献金者や団体の名前をすべて『生活』（最初は『申報』にも掲載した）の誌面に掲載し、公開した。のちにあまりにも膨大であったため、『生活』誌面の代わりに献金者リストを別刷の形で献金者へ郵送した。また、馬占山へ送金した後の受け取り状況についても定期的に報告した。たとえば、銀行からの領収書を写真付きで掲載した[16]。『援助黒省衛国健児捐款結束報告』と題した最終報告は、1932 年 7 月 23 日の『生活』誌面に掲載され、同時に立信会計師事務所の証明書も合わせて掲載された。それによると、1931 年 11 月 14 日

---

12 『生活』第 7 巻第 2 号（1932 年 1 月 16 日）
13 『生活』第 7 巻第 3 号（1932 年 1 月 23 日）
14 『生活』第 7 巻第 4 号（1932 年 1 月 30 日）
15 『生活』第 7 巻第 9 号（1932 年 3 月 5 日）
16 写真付きの領収書は、以下の誌面に掲載されている。『生活』第 6 巻第 50 号（1931 年 12 月 5 日）、『生活』第 6 巻第 52 号（1931 年 12 月 19 日）、『生活』第 7 巻第 1 号（1932 年 1 月 9 日）、『生活』第 7 巻第 2 号（1932 年 1 月 16 日）。

から1932年2月28日にかけて集められた献金は129865元9分であった。そして、銀行に預けて得た利息が49元5角8分で、合計129914元6角7分となった。そのうち、銀行を通して馬占山へ送金したのは120007元であった。支出については、「電報費」が7元3角、「票力」が2元7角2分であり、支出総額は120017元2分であった。そして、残りの9897元6角5分はすべて十九路軍支援に使われた。献金者名については、これまで『生活』誌面に掲載してきた。これまでの掲載には、生活週刊社がすでに2000元の印刷出費がかかった。また、未掲載の献金者名については、別途郵送することにした。[17]生活週刊社に集められた支援金のほとんどは「国幣」であるが、わずかではあるが、「外幣」（12月3日）もあった。香港ドル（12月17日）の献金については、「国幣」相当の額として計上されたが、「外幣」についての記述はなかった。12月3日の「外幣1元外角14枚」について、どのように扱われたのかは不明である。

●おわりに

参考文献：

石島紀之「抗日民族統一戦線と知識人——「満州事変」時期の鄒韜奮と『生活』週刊をめぐって－前編」『歴史評論』256（1971）: 22-50
島田俊彦『近代の戦争　第四巻　満州事変』（人物往来社、1966）
常城「馬占山」田中哲哉訳『中国研究月報』415（1982）: 30-37
張洪軍「鄒韜奮的『生活』週刊与馬占山的江橋抗戦」『理論学刊』160（2007）: 97-100

[17] 『生活』第7巻第29号（1932年7月23日）